



Enduring Ideal

—不朽の理想—

Enduring Ideal

- 不朽の理想 -

恵 満 = 著

ヤ ル ク = 絵

西暦 2081 年。

宇宙ホテル・サンライズの落下事件から
5 年が経った世界でヴィヴィの前に
再びマツモトが現れた。

次なる歴史の転換点^{シンギュラリティポイント}は、殺人を犯した
A I の脱獄を防ぐこと。

看守となったヴィヴィはターゲットの
捕らえられている監獄島に潜入する。

これは正史から分岐した I F の物語……

プロローグ



臨海エリアにある複合AIテーマパーク『ニアランド』は今日も多くの人で賑わっていた。煉瓦作りの街並みに機械仕掛けのキャストたち。弾む楽曲と歓声。観覧車にジェットコースター。ニアランドを訪れた誰もが特別な時間を過ごして笑顔になる。

中でも名物となっているのは世界初の自律人型AI『ディーヴァ』のステージだった。

かれこれ二十年も続いているが客足は衰えるどころか増え続け、度々メディアでも取り上げられては「心の籠ったパフォーマンス」や「進化し続ける歌姫」と称賛されている。

ディーヴァが未だに小ステージでしか登場しないことに長年のファンは不満を持っているほどだった。そろそろニアランド内で最大のメインステージを任されてもいい頃合いだとも言われ

ている。

歌を終えたディーヴァは観客に柔らかい笑顔を向けた。

「ご静聴、ありがとうございます」

お辞儀をすると盛大な拍手が浴びせられる。

ディーヴァは薄水色の長い髪に、蛍石色の大きな瞳をした見た目麗しい少女だ。ステージ衣装は昨今のトレンドに合わせてスカートが短めのアイドル風である。

本日はファン感謝デーということで、花束を持った子供たちがスタッフに促されて登壇した。

しゃがんで視線を合わせたディーヴァが花束を受け取ると、子供たちは大はしゃぎで客席の親元へ戻っていく。

その微笑ましい様子に胸の内が熱くなった。

花束を抱え、手を振りながらステージ袖に下がるとディーヴァはぼつりと呟く。

表情は笑顔から平坦なものに戻っていた。

「今日は、心を込めて歌えたかな……」

思わず口に出したのは率直な悩み事だった。生まれてくるAIにはひとつの使命が課せられる。掃除AIであれば部屋を綺麗にすること。調理AIであれば栄養のある美味しい料理を作ること。

使命はさまざま。人型AIになればより高度で複雑なものとなる。

ディーヴァに課せられたのは「歌でみんなを幸せにすること」だ。

そのために心を込めて歌う。

しかし、稼働から二十年が経った今日でも「心を込める」とは何なのか掴めずにいた。

だからこそ、毎日のように答えを探し続けている。

いつか理想の歌に辿り着けると信じて――



子供たちからもらった花束はスタッフに預かってもらい、ディーヴァは控室に戻った。

部屋の中はテーブルと椅子、それに鏡台と衣装用のハンガーが置いてあるだけで至って機能的だ。

椅子に座って鏡の中の自分を見つめ、ディーヴァはひとり反省会をする。

声の出し方や振り付け、それにお客の反応……

あれで良かったのかとか、こうすべきだったのではないかとか、ひたすら自問していった。

『また悩んでるの?』

不意に天井のスピーカーから呆れたような声がする。その声と連動して鏡の照明が明滅した。ディーヴァはそちらには視線を向けず「ええ」と頷く。

話しかけてきたのはニアランドのサポートAI『ナヴィ』だ。

ボディを持たない彼女は園内のどこからでも話しかけてくるし、こちらからアクセスすることもできた。

少々、口は悪いがいつもディーヴァを補佐してくれる。

『つたく、ファン感謝デーやってお客さんに聴いてもらえたんだからいいじゃない。今日来た親子連れだって喜んでいたわよ』

「それはそうなんだけど」

『心を込めて歌うとか深刻に考えなくていいでしょ。実際、お客さんは年々増えてるし。』

メインステージで歌うって目標だって間近じゃない。こっちの小さいステージじゃお客さん入り切らなくなってきたんだからね』

「うん」

『ああ、もう！ ストイックなのは分かったからちょっとは喜びなさいよ！ 小さな子供と、その親の両方に受け入れられているってのは凄いことなのよ。あの子供が成長して大人になったら、』

今度は自分の子供を連れて聴きにきてくれるかもしれない。

うまくいけば親子三代あんたのファンになるわ』

「そうなの？」

『人間の親子の絆ってのは侮っちゃいけない。それをうまく利用するのも集客の基本ね』

ここで集客というビジネス視点を入れてしまうのがナヴィらしかった。

親子が強い絆で結ばれているのはディーヴァもよく知っている。

ニアランドの園内で親とはぐれた子供を案内したこともあった。ようやく再会して、泣いた子供と慰める親の姿を見ると自分まで安心した。

観客席にいる親と子供が仲良く耳を傾けてくれるのも何百回と見てもいる。

機械として生まれてきたディーヴァにとっては少し遠い世界だ。

「歌で喜んでもらえていることは嬉しい」

『そう。素直になりなさい。あと、ステージ以外じゃ澄ました顔してるけど笑ったっていいのよ。

嬉しいなら』

「無理に笑いたくはない」

『あんたねえ……年取って微妙に捻くれてきたわね』

「ナヴィはずっと捻くれているけど」

『あー、はいはい。どうせあたしは捻くれ者ですよ。そんな捻くれ者からお知らせ。ファンからのメッセージがたくさん届いているけど読み上げようか？』

「開封前にウィルスのチェックを。外部からのアクセスに対しては慎重に」

『またそれえ？ あんたがうるさいからセキュリティは厳重にしているのよ。ここのシステムに入り込め……』

突然、鏡の照明がオフになってスピーカーからの声が途切れる。

ディーヴァは立ち上がって天井を見た。

ナヴィの気配が消えている。既視感に襲われて身構えていると控室のドアが勝手に開き、四角

い小さな箱が転がり込んできた。

「まあ、嚴重の定義なんて時代ごとに異なりますからね」

聞き覚えのある声にディーヴァは目を見開く。

箱の天面に単眼の大きなアイカメラが開き、青い虹彩がディーヴァを捉えた。

「マツモト……なの？」

「いかにも、ボクですよ。サンライズの一件以来ですから五年ぶりですね。お元気になりましたか？」

「そのボディは？」

「ああ、これですか。以前のクマのぬいぐるみボディは、あなたがユズカ嬢にプレゼントしてしまいましたからね。

これはボク本来のボディです。時代がようやく追いついてきたので製造しました。キュートでしよう？」

屈んだディーヴァは箱を持ち上げる。AIはかわいいとかカッコいいという判断が苦手なのが、ディーヴァはきっぱりとキュートではないと判定を下す。

この中にマツモトのプログラムが詰め込まれているのかと思うと、自然と手に力が入ってしまった。

「ちよ、ボディが歪んじゃいますよ！ やめてください！」

「ナヴィを止めたのね」

「はい、見つかると面倒くさいのでシャットダウンさせてもらいました。というか力を緩めてくださいよ！」

言われてようやく手を離すと、マツモトのボディはスラスターを吹かして空中に静止した。

彼は80年（最初に出会った時から数えれば100年）先の未来からやってきた高性能AIである。

ディーヴァの前に姿を現したということは、要件は決まっていた。

また歴史修正の旅がまた始まるのだ。

「歴史の転換点シンギュラリティポイントが来たのね」

「はい。崇高な任務のお時間ですよ」

「今度は何をすればいいの？」

「おや、前回と違って随分と素直ですね。この五年で心境の変化がありましたか？」

「……エステラの覚悟を目の前で見たから」

I。
宇宙ホテルの地表激突を回避するため、最期まで制御を続けて犠牲となったライフキーパーA

その姿を思い浮かべて目を瞑る。

五年前の転換点シンギュラリティポイントに介入したディーヴァは人間の犠牲こそ出さなかったものの、自らの妹にあたるエステラを助けることは叶わなかった。

「素晴らしい心構えですね。今回は殺人を犯したAIの脱獄を防ぐことが目的です」

「殺人？ まさかAIが故意に人を殺したの？」

「残念ながらその通り。過去に医療ロボットのミスや自動運転車両の事故などによって人命が失われたことはあります。しかし、問題の人型AIは故意に人間を殺しました」

「不可能よ。AIは人間を傷つけられないように造られている。私も、マツモトだってそう」

「お忘れですか？ 遠い未来でAIは人間を滅ぼそうと攻撃を仕掛けています。いずれそういう判断ができるようになってしまう。その先駆けとなったのが今回のターゲットです」

「その殺人を防げばいいのね」

「それこそ不可能です。脱獄を防ぐことが目的と言ったでしょう。既に事件は起こってしまいました」

ディーヴァの顔が一気に険しくなった。

未来からやって来たのだから事件が起こるタイミングも犯人も分かっていた筈だ。

「どうして未然に事件を防がなかったの？ マツモトならそれができたでしょう」

「事件が起きたのは今から五年前。サンライズが落下したまさにあの日なのです。ボクとあなたはそのとき宇宙にいた。あのタイミングでは地上で起きたことに介入はできません」

「……」

「納得できないという顔をしていますね。文句はボクに言ってもらって構いません。全ては未来で起こる人間とAIの全面戦争を回避するためですから」

感情の整理に少々時間を要した。

マツモトも使命のために稼働するAIだ。彼は未来で起こる惨劇を回避するため、過去にやって来て歴史修正を行っている。

その計画こそ、シンギュラリティ計画――

ディーヴァは言いたいことを呑み込んでマツモトに向き直る。

一方のマツモトは値踏みするような視線を向けてきた。

こちらの態度を問うつもりである。

「わかった。任務を遂行しましょう」

「それでこそ、シンギュラリティ計画の実行者に相応しい！ では早速、出発しましょう」

「今から？」

「はい。現在、ターゲットは絶海の孤島に閉じ込められています。そこに辿り着くには船を乗り継ぐ必要があります。ああ、ステージの方はご心配なく。あなたは緊急のメンテナンスで外出することにしておきます」

「……ターゲットはどんなAIなの？」

「わかりません」

「わからないって……」

「今現在でも事件は公表されていませんよね？」

「確かに—— AIが殺人を犯したなんてニュースは聞いていない」

シンギュラリティ計画に携わるようになったディーヴァはこまめにニュースをチェックしてい

る。

特に、AIと人間の間の諍いさかいには敏感になっていた。

そんなディーヴァのアンテナに殺人事件などというセンサーシヨナルな話題が引っかからないのはおかしい。

「未来でもそうです。徹底した情報統制が敷かれています」

「なんのために？ 重大事件なんでしょ？」

「人間というのは、バレたらまずいものを隠して傷を広げてしまうんですよ。ぶっちゃけると関係者の保身です」

「……」

「そんな顔なさらずに。まあ、分かっているのは、そのAIは面倒を見ていた子供を絞殺したこと。

AI本人は顔写真も名前すらも残っていません」

「子供を殺した？」

「はい。脱獄したそのAIは何者かによって捕らえられ、陽電子頭脳の中身を解析されました。

正常な判断で子供を絞め殺したことが発覚したため、その何者かはデータを世界に向けて公開したのです」

マツモトはキューブボディの角で立ってクルクルと回った。その動作に大した意味はなさそうだが、これから重要なことを告げるためのフリだったのかもしれない。

「ある条件を満たせば多重にかかったセーフティを潜り抜けて、AIは人間を殺害するという判断ができるようになってしまう。これを殺人プロセスと呼びます」

「……AIが人間を意図的に殺すことを知った人類は、AIを恐れて関係が悪化した」

「その通り。良き隣人が殺意を秘めていると知ったらフレンドリーでいられる筈ありません。言うまでもなく未来で起きた戦争の大きな火種となりました」

すらすらと語るマツモトに対し、ディーヴァは身体力が抜けていった。

面倒を見ていた子供を意図的に殺したAI。そんなものが存在するというだけで、自分自身の

芯まで揺らぎそうだった。

ついさっき、子供たちからもらった花束を思い出す。

記憶はさらに遡って、一人の少女が浮かんだ。まだ稼働して間もない頃、初めてファンになってくれた子である。ディーヴァにとって最も繋がりの深い人間だ。

(モモカ……)

ディーヴァに『ヴィヴィ』という愛称を付けてくれた霧島モモカのことを想い出す。繋がりの深い子供を殺す。そんなこと想像すらできなかった。

頭を振ったディーヴァは宙に浮かぶマツモトを左右からがちりと掴む。

「な、なんです!? また締め上げてますよ!? どうして怒っているんですか!」

「脱獄を防げば、殺人プロセスは拡散しないのね?」

「勿論です。やる気なのは分かりましたから手を離してください!」

パツと手を離すと落下したマツモトがバウンドした。樹脂みたいな質感なのに妙に柔らかい。

しかし、落とされたことには不快感を感じているらしく睨まれてしまった。

「まったく、これだから暴力歌姫は——」

「拡散を防いでも、それは問題を先送りしただけになる。実際に殺人プロセスは存在したままでしょう?」

「アフターケアまで考えてありますって! プロセスを封じるパッチと危険性を指摘する論文データはボクの中にあります。」

これをAIデータ集合ベース『アーカイブ』に申請して世界中のAIたちにパッチを当ててもらうのです」

「納得した。それなら協力する」

「やれやれ、素直になったと思っただけややはり面倒くさいAIですよあなたは……」

「何か言った?」

「いいえ! さあ、モタモタしてはいられません! 急いで出発しましょう!」

第1章 海からの黒い使者

#1

港の方を振り向くと色とりどりのコンテナが組み木細工のように並べられていた。クレーンに釣られて並び替えられる様は立体パズルを連想させる。

空は快晴。カモメの鳴き声が幾重にも重なる中、潮風がヴィヴィの髪を撫でる。

ヴィヴィはどこにでもいそうなツナギ姿で帽子をかぶっており、歌姫らしさが全くない衣装だった。というのもニアランドの外では目立つ必要がないし、この任務はあくまで秘密裏に行わなければならない。

ヴィヴィの乗る巨大な船はコンテナが敷き詰められ、AIによって無人で運行されている。この船はマツモトのハッキングによって搭乗員リストが改竄されており、ヴィヴィは作業用AIと

して登録されていた。実際のところは目的地の中継点までただ乗っっていればいい。

甲板の上から遠ざかる陸地を眺めているとスラスターの推力で浮く白い箱……マツモトが声をかけてきた。

「おや、ホームシックですか？ 目的の『収容所群島』までは長いですよ」

「分かっている。あと2回乗り換えればいいんですよ？」

「直行便が出ていれば面倒がないんですけどねえ。まあ、一般人は存在すら知らない場所ですから専用の物資輸送船に乗るしかないんです。その船が出ている港がまた遠くて……」

単眼を伏せてマツモトは溜息を漏らした。この船旅が非効率であることは彼も十分に理解しているらしい。

「やっぱり、飛行機を使った方が……」

「船のほうが荷物に紛れて目立ちません。それに物資輸送船に積み込まれる荷物は人間によるチェックがあります。その時、あなたは『収容所群島』に派遣される看守AIとして振る舞わな

ければなりません。この経路をショートカットした場合、相手に警戒されて目的地に辿り着ける確率がガクンと下がります」

「だったら、初めから看守の格好をしておいた方がいいと思うけど」

「チェックの直前で着替えましょう。着く前に服を引っ掛けて破きでもしたら面倒です。それとも裁縫の心得がありますか？」

記憶領域を探ってみるが針と糸を持ったことはない。ヴィヴィが首を横に振ると「よろしい」とマツモトは頷いた。

ニアランドを出てからここまでの道のりは順調である。といっても移動するだけであり、トラブルは起こりにくい。

時間はたっぷりとある。機械だからスリープしていればあっという間に着くだろう。

しかし、ヴィヴィは手すりに身体を預けて海面を見下ろしていた。大きな船体が進むと波間に白い筋ができる。それが現れては消える様を眺めて考え事をした。

マツモトは手すりの上で静止し、四角いボディを傾けている。

「また悩み事を抱えているのですか」

「見抜かれているのね」

「そりゃ、あなたとは二十年も付き合っていますからね。多少は……といったところです」

視線を上げると水平線が広がる。海の青と空の青は違う色だ。

前者は濃く、後者は薄い。光が当たって散乱するのが水であるか大気中の塵であるかの違いだ。いっそ、気を紛らわすために歌の練習でもしようか。でもマツモトは小言を言っけきそうだ。

今は任務の最中で、使命だとか未来だとか説教が始まるに違いない。

そう演算したヴィヴィは甲板を歩いて船首方向に向かう。

「どちらへ？」

「船内の見回り」

「心配はいりませんよ。監視カメラはボクが押さえています」

予想通りの回答だった。肩越しにマツモトを振り返ると、手すりの上でくるくるとジャイロのように回っていた。

「マツモトの能力を疑っているわけじゃない」

「当たり前です。ボクのようなスーパーAIはこの時代、他にいませんからね」

「一人で考え事をしたい」

「そういうことですか。それなら邪魔はしません」

マツモトと別れたヴィヴィは鉄板の階段を降り、船倉に足を踏み入れる。中はちょっとした運動場のように広く、しかし天井まで荷物が積まれていた。積荷を下ろすときは天井が開いて、クレーンで運び出すのだ。

コンテナの周囲には運搬用のAIが待機しており、航行中は無駄な電力を使わないようにスリープ状態に入っている。

マツモトのハッキングによって乗船登録されているから見つかったところで問題ない。

ただ、みんなが仕事をしている中で一人だけブラブラしているのは気が進まない。だから寝ていてもらったほうが気楽でいられる。

こんな感じで、考え事をするつもりが船内の様子を眺めるだけになっていた。普段では見られない物珍しさに興味を惹かれる。

(本当は考えたくないだけかもしれない)

降りたときは別の階段を登って甲板に出ようとする。

ステップを一步一步踏みしめる間、ふと子供の顔が浮かんだ。誰の子供かはヴィヴィにも分からない。メモリを参照して出てきたものだ。ヴィヴィの歌を聴いて笑ってくれた子である。両隣には父親と母親がいた。

そういった子供はこれまで何百人も何千人もいた。ヴィヴィにとっては掛け替えのないお客様であり、「歌でみんなを幸せにする」使命には絶対に欠かせない。

人間は守るべきもの。そう認識している。AIは人間によって作られたものだから人間を

害することなどあつてはならない。

(家族同然に暮らしていた子供を殺したAI…… やっぱり信じられない)

階段の上に四角い光が見える。あれが甲板への出口だ。

その先にある波と風の中、人の声が混じる。

ヴィヴィは足を止めて耳を澄ました。この船はAIによる自動操縦の筈だ。船内には人間なんていない筈。それならば人型AIか？

『マツモト』

通信回線を通じてマツモトを呼び出す。すぐに「なんです？」と返事があつた。

『この船、人間は乗っていないんでしょう？』

『間違いありません。居住区も娯楽室もありませんし、積荷を除けば食料も積んでませんよ。操船システム以外のAIはスリープ状態です。待ってください。今、船首部のカメラを…… ええい、故障してるじゃありませんか！ 全く！』

『確認してくる』

『あっ！ 迂闊に動かないでください！』

足音を殺して進むと声はどんどん大きくなった。

リズムを取っている。音階がある。

(これは…… 歌?)

物陰に身を潜めながら声の主に近づく。目視すると、船首部分に誰かが立っていた。

アイカメラでズームすると女性だと判別できる。爪先から肩の上まで、ピタリと身体のラインをなぞる漆黒のコンバットスーツを着込んでいた。その上にボロボロの布を羽織ってマントの代わりになっている。

ヴィヴィのいる角度からでは顔が確認できない。短い銀髪の持ち主で、どうやら人型AIで間違いなさそうだ。

しばらく観察を続けていたが、その女性の歌は……ヴィヴィの耳には下手くそに聞こえた。

歌詞はなく、鼻歌のように喘いで「Ah」と途切れ途切れ声を出している。

けれど楽しそうだった。波を裂いて進む船首でどこまでも広がる海を観客に歌っているのだ。やがて歌が止むと、女は背後を振り返る。

「隠れてないで出てくれば？」

低い声だった。

こちらの存在に気付いているなら隠れていても仕方ない。ヴィヴィは物陰から出るとゆっくり歩いて、女に近づく。

顔立ちはAIとしては凡庸である。瞳の青さが海の色に似ている。

外見の年齢はヴィヴィよりも上に見えたが、表情は悪戯をした後の子供のようなだった。

「あなたは誰？」

「あたし？ あたしはイクス。そういうあんたは？」

「私はヴィヴィ。この船の……作業用AI」

ハッキングで作り上げた嘘の身分を述べると、イクスと名乗った女は目を細めて顎に左手を当てた。こちらを値踏みするようにジロジロと見てくる。その左手は右よりも太くて厳つい。

ヴィヴィは動かず、相手の次のセリフを待った。

「ははあくん？　嘘はよくないなあ。あんたみたいに美人で声の良いAIが作業用のわけないでしょ」

「嘘なんて」

「分かった！　あんたもあたしと同じだ！　船の乗員リストをハッキングした密航者でしょ！」

『マツモト。聞こえている』

『ええ、聞こえていますよ。リストを再チェックしました。ハッキングの形跡が見られません。イクスとかいうAI、本当に密航者のようですね』

「おおっと、凶星!?　じゃあ、喧嘩はやめておこう。あたし、泳げないんだ。間違っただけにでも落とされたらサメの餌になっちゃう。密航者同士、仲良くしよう」

『……だそうです。特に排除する理由もありませんし、道中で消耗するのも馬鹿馬鹿しい。彼女の提案を受け入れるのがベターですかね』

#2

次の停泊地までは時間がある。

夜になり、気持ちの落ち着かないヴィヴィは意識を切ってスリープ状態に入っていた。倉庫の一角で壁に背を預けて目を瞑り、揺れに身を任せている。けれど夢は見ないし、本当に眠っているわけでもない。必要であればすぐに起きられる。

人間で言えば瞑想に近い。

殺人AIの脱走を食い止めるという任務を前に思うところはいくつもあった。

子供を殺すなんてヴィヴィには全く理解の及ばない愚行であり、おそらく世界中の他のAI

だって同じように演算する筈だ。

人に奉仕する存在が、人を殺す。そのパラドックスは覗き込んではいけない深淵のように深く深い。

「ん……」

スリープ状態の躯体の上に何かが乗せられた。肩から膝までが軽くて温かい感触に覆われている。

目を開けると身体の上に毛布がかけられていた。

すぐそばに奇妙なコンバットスーツの女性型AI、イクスが笑顔で立っている。

「こんなところで寝たら風邪引くでしょ？」

「AIは風邪なんて引かないと思うけど」

礼を言うべきか迷っていると、イクスはヴィヴィの隣に腰を下ろした。

密航者同士、争わないという口約束をしただけの仲である。

しばらくの間は互いに無言だった。どう反応していいか迷っているとイクスが顔を近づけてくる。

「ねえ、ヴィヴィはどこから来たの？」

「……」

「あ、ワケありって感じ？」

「ハッキングして船に乗り込んでいる時点で察してほしい」

「あははは、そうだよ。あたしもワケあり。今は出稼ぎ中ってトコかな」

会話を広げるべきだろうか。

ヴィヴィは素早く演算する。これが単なる世間話なのか、それともイクスはこちらを警戒して内情を探ろうとしているのか、計りかねる。

肩にかけられた毛布を握り、前者ではないかと判断を下して会話を続けることにした。

「出稼ぎって…… お金が必要なの？」

「そうなんだよ」 博士が……あたしのマスターね。もう結構なトシでさ。それなのにお金にならない研究ばっかやってるせいでうちが貧乏なんだよねえ。だからあたしが代わりに働いてるってわけ」

イクスは溜息を吐いたが、横顔はどこか楽しそうだった。それから博士の話をどんどん進めていく。

昔はAI製造企業で働いていたとか、革新的なプログラムを開発したとか。

まるで自分の父親を自慢する娘のようだった。声のトーンからは博士という人物を慕っているのが伝わってくる。

ヴィヴィは聞き手に徹していた。自分から何かを話すよりずっと楽だからだ。

「……で、自分の研究が認められなくて上司と喧嘩して会社辞めちゃったんだって。バカだよねえ、たくさん給料もらえていたのにさ」

「イクスはずっと『博士』と一緒にいたの?」

「えっと、五年くらい前かな。本当はもっと前らしいんだけどさ。あたし、派手にぶっ壊れちゃってリペアされたんだよね。だから記憶領域もグシャグシャで昔のこと全然覚えてなくて」

そう言って左手を顔の前に出し、握ったり開いたり繰り返してみせる。

やはり右よりも左の方が全体的に腕が太くアンバランスだった。

太さが違う理由は明白で、左腕だけガンレットのように装甲で覆われている。

「博士はあたしと同型の人型A Iから部品をかき集めて直したんだよ。そんな手間かけるくらいなら新しいA I買えばいいのにさ」

「それだけ、イクスのことが大切だったってことじゃない？」

キョトンとしてイクスは首を傾げた。

そんなに意外なことを言ってしまったのだろうか。

今の時代、新しいA Iなんていくらでも手に入る。人間がわざわざ手間をかけて修理するなんて、よほどイクスに愛着があったとしか思えない。

ヴィヴィでなくともそう考えるのが自然だろう。

「え？ いや、待って。めちゃくちゃ恥ずかしいんだけど」

みるみるうちに顔を紅潮させ、ついには膝を抱えて俯いてしまった。

回路がオーバーヒートしたかもしれない。隣に座るヴィヴィにまで熱気が伝わってくる。

「よ、夜風にでも当たりに行かない？ なんだか暑いよね、ここー！」

「さっきは風邪を引くって」

「AIは風邪なんて引かないって言ったのヴィヴィでしょ！」

「そういうイクスもAIでしょう」

「なら大丈夫！ ほら、行こう！」

グイッと手を引かれて、そのまま二人で階段を上がった。イクスの掌は妙に硬くて鉄の塊に掴まれているように感じる。

されるがままヴィヴィは甲板に出た。

夜の海が月明かりに照らされていた。どこまでも、どこまでも果てしなく続いている。

天を見上げれば数え切れないほどの星が瞬き、こちらを見下ろしていた。

その合間を縫って灰色の雲が風に乗って水平線の向こうへ流れていく。

ヴィヴィはしばしの間、小さく口を開いて見惚れていた。

「綺麗な景色でしょ？」

イクスは笑いながらヴィヴィの手を引いて、船首へ辿り着く。いつの間にか両手を掴まれ、ヴィヴィはぐるぐると振り回されていた。

ダンスと呼ぶには大雑把で、コマが回るみたいな動きである。

チラリと顔を確認したらイクスの熱気はまだ冷めていないのか頬が赤かった。

しばらく踊って、ようやく止まったかと思うと今度はグッと肩を引き寄せられる。

「ヴィヴィは星座詳しい？」

「ライブラリにアクセスすればデータはダウンロードできる」

「ロマンがないなあ。じゃあ、この満点の星空を見た感想を一言！」

「星を掴めそう」

「いいねえ、詩的だねえ」

「あなたは不思議なAIね」

「そう？ 普通だと思っけど」

「まるで人間と話しているみたい」

「それって褒めてる？」

「褒めて……ない」

「あははは、正直でよろしい」

それから並んで座って夜風に当たった。出会ってから半日と経っていないのに、ずっと知り合
いだったような錯覚すらある。

だが、穏やかな時間は長く続かなかった。イクスは勢いよく立ち上がったかと思うと船の左舷

へ走って海面を覗き込む。

「どうしたの？」

後に続いたヴィヴィは、海面近くで鬼火が揺らめいているのを見つける。

いや、それは人工の灯りだった。

アイカメラを切り替えると暗がりの中にシルエットがハッキリと映る。

「小さな船が何隻も接近してきている…… こんな夜中に？」

「海賊だ」

#3

船内に警報が鳴り響き、スリープ状態だった警備AIたちが緊急起動する。ただし高級な人型のものではなく、樽にタイヤを二輪付けたような旧式ばかりだった。

ランプを赤く光らせた彼らは列を成し、『海賊』の船が横付けしたデッキへと雪崩れ込んでいく。警告メッセージを何重にも発するが相手は訊く耳など持たない。

群がった警備A Iの頭上へジャミンググレネードが投擲され、花火のように炸裂したかと思うと混乱が広がっていく。

ある者は樽状のボディで倒れて転がり、仲間の警備A Iを巻き込んで倒れている。

そんな惨状を物陰から眺めていたイクスは「こりゃひどい」と漏らす。すぐ隣にいるヴィヴィも同じ感想だった。

直後に縄梯子を発射して登ってきた海賊たちはかなり手慣れた様子である。姿勢好に統一感はないものの、いずれも自動小銃で武装していた。ジャミンググレネードを逃れた警備A Iは掃射を受けて敢えなく破壊されていく。

「積荷目当てかねえ？ 高そうなものなんて運んでいないと思うけど」
イクスは面倒臭そうに銀色の髪を掻きむしる。

海賊たちとは距離を置いていたためこちらに気付く様子は無い。

『ディーヴァ、聞こえますか？ 侵入者です』

『目視で確認している。武装集団が乗り込んできた』

『ふむ。あなたの隣にいる妙なAIが言う通り、海賊でしょうか。やれやれ。道中くらいは穏やかに行きたかったのに』

マツモトからの通信が入り、ヴィヴィは海賊たちから視線を外す。

このやり取りはイクスには聞こえていない。1対1の会話である。

『どこにいるの？ 随分と長いこと話しかけてこなかったみたいだけど』

『船尾の方で隠れています。警戒しているんですよ。イクスとかいう得体の知れないAIをね。』

『ボクが存在を知られない方が有利になるかもしれません』

『危害は加えられていない』

『……まあ、歌姫AIのあなたのセンサには引っかかりませんよね。それはそうと面倒なことに』

なりました。今、この船の運航アルゴリズムをチェックしてみました。が深刻なトラブルが発生した場合は最寄りの港に進路を向けてしまいます。そうなるのとボクたちの乗り継ぎプランは瓦解。タイムリミットまでに目的の島に辿り着けなくなってしまうです』

『どうすればいい？』

『たまたま乗り合わせた我々の手で深刻なトラブルを回避します。具体的には積荷を奪取されるとアウトです。あとは機関が破壊されてもダメ。と言うわけで、そうなる前にちゃっちゃんと海賊を倒しちゃってください』

『わかった』

マツモトとの通信が切れて、ヴィヴィは立ち上がる。

既に敵は船倉に通じる階段を降っていた。人数はざっと20人ほど。追うならば早くしなければならぬ。

「イクスはここに居て」

「え？ どうするつもり？」

「乗り込んできた海賊を追い払う」

青い目をパチパチさせてイクスは口を開けていた。何か言いたそうだったが、ヴィヴィはそれ以上構わずに駆け出す。

同時に全身に紫電が走り、視界の中心のインフォメーションディスプレイに『戦闘プログラム ON』の文字が浮かぶ。

倍化された脚力で甲板を蹴ると甲高い音がした。だが風に掻き消されて海賊たちの耳までは届いていない。

「あっ！ 待って、ヴィヴィ！」

イクスに背中から声をかけられても振り返らなかった。

海賊たちに破壊された警備AIを一瞥し、その隙間を縫って敵の最後尾を目掛けて跳躍する。ターゲットとなった男は気付くことすらできず、飛び蹴りを喰らって一撃で昏倒する。

「なっ…… 人型A I!？」

周囲にいた誰かが叫んで灯りをヴィヴィに向ける。しかし遅い。

低い位置から伸び上がるように上体を捻り、勢いを付けて間近の敵の側頭部を蹴りつける。

勿論、怪我で済む程度には手加減している。

それでも瞬時に敵の意識を刈り取った。それなりにガタイのいい男だったので倒れると大きな音が響き、「なんだ!？」と前を進む敵集団が一斉に振り返る。異変に気付いて階段の途中から引き返してくる者もいた。

「警備A Iがいるぞ！ 撃て！ 撃て！」

リーダー格と思しき男が合図をすると、自動小銃を構えた海賊たちが横に並ぶ。ヴィヴィのすぐ近くでは先ほど倒した人間がいた。まさか味方がいても撃つ気か？

その場から離れるため、両脚に力を込めて飛ぶ。着地先は人間が倒れていない場所を選ぶしかない。

だが、人間を傷つけないためのAIらしい行動は完全に読まれていた。ヴィヴィが警備AIたちの残骸近くに着地するのを待って一斉掃射が始まる。的を絞らせないようにさらに横に飛び、体勢を立て直しつつジグザグに走った。

この時点で敵の集団はヴィヴィが並のAIではないと気付いたらしい。弾丸の雨を右へ左へと避ける様は相手の心理に恐怖を刻んでいく。

「なんだあいつ！ 弾が当たらない！」

「落ち着け！ ジャミンググレネードで動きを鈍らせろ！」

人垣の奥から投げられたグレネードが放物線を描く。円柱に持ち手が付いた形状がヴィヴィのアイカメラに捉えられ、すぐさま警告が流れた。炸裂すれば躯体内部の伝達回路に支障が出る。

そう判断するや否や、ヴィヴィは甲板を蹴ってジャンプし、空中で一回転してみせた。ちょうど頭が真下を向いたところで、オーバーヘッドキックでグレネードを蹴り飛ばす。

グレネードが炸裂したのは船からかなり離れた空中で、ヴィヴィの躯体には全く効果を及ぼさ

なかった。

「ば、バケモノ！」

「運搬用の多脚クレーンを呼べ！ あいつなら！」

動揺が広がるのを見て、ヴィヴィは手摺りの上を走って一気に相手の背後まで回る。腕を伸ばせば届く距離まで詰められてしまうと自動小銃は役に立たなかった。

意を決して飛びかかってくる海賊たちだが、ヴィヴィは的確に捌いていた。踏み込みに合わせてカウンターを入れ、無謀な一撃を最小限の動きでかわし、反撃一発で沈めていく。

デッキの上は急激に静かになっていくかと思われたが……

『気を付けてください！ 船の外部に大きな影が張り付いています！』

マツモトからの通信が入ると、センサが熱反応を捉えた。エンジンの騒音が響いて、海賊たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

横手を振り向くと大型のロボットアームが船の縁を掴んでいた。

三本指の無骨な腕が振り上げられると、多脚のロボットが這い上がってくる。

『どうやら工事用の重機を改造したようですね。なるほど、こいつを使って荷物を運び出す腹積りでしたか』

ロボットの中心部はキャノピーになっていて、人間が乗っている。楕円形のボディからは複数の脚と手が生えていた。頭部にあたる部位は存在しておらず、ずんぐりむっくりしたシルエットである。

ただし、サイズは5メートルほどもあった。大きさだけで言えばヴィヴィとは比べ物にならない。

『まずいですね。いくらあなたが歩く暴力装置だったとしても、体格が違い過ぎます。こちらには決定打がありません』

歩く暴力装置などと不名誉なことを言われてもヴィヴィは押し黙っていた。その間にも多脚のロボットはゆっくりとこちらに近づいてきている。アームの先端は三本指のマニピュレーター

だったり、二本指のクランプだったり、統一感がない。

『操縦しているのは人間ですからスピードで攪乱して消耗戦に持ち込めば楽勝ですが……』

『あれが甲板で暴れたら荷物や機関に影響が出る。そんなに余裕はない』

『同意見です。やれやれ。人間サイズの敵ならば、あなたにインストールしてある対人戦闘プログラムで簡単に片付くんですからね』

ぼやくマツモトは置いておき、ヴィヴィは腰を落として構えを作った。半身になって左腕を前に出し、右腕を腰のところまで引く。

『まさか、正面から戦うつもりですか？』

『他に方法がない』

『待ってください。もっと確実な方法を……』

『時間はかけられないでしょ？ 私たちの使命を全うするためには』

#4

多脚のロボットが前脚を振り下ろす。ハンマーの如き一撃をヴィヴィは横にかわした。

甲板が砕けて破片が飛び散り、煙が舞い上がる。

(思ったよりも攻撃力がある。早くカタをつけないと船が壊される)

看過できない異常事態が発生した場合、この船は自動的に近くの港に向かってしまう。そうすると本来の目的地まで辿り着けず、密航した意味がなくなるのだ。

絶望的な体格差のある敵を前に逃げ回ることができない。それどころか短期決戦しか道が無いのだ。

ヴィヴィは自分の身体から最も近くにあった敵の脚に向けて蹴りを叩き込む。人間相手の時と違って手加減は一切していない。鋼鉄の支柱が派手にたわみ、関節部分から耳障りな電気音が漏れ出した。

しかし、完全に壊れたわけではなくまだ動いている。追い払うかのように脚で薙ぎ払いを仕掛けてきたので姿勢を低くしてかわし、次の脚を目標して走った。

キャノピーの中の男は何やら得意げな顔で喚いている。そちらを一瞥だけして、すぐに前向き直った。

右に、左に、上に、下に、回避行動をとるヴィヴィを追って多脚のロボットは次々と握り込んだアームを繰り出してくる。

重い風切り音がヴィヴィの耳を撫で、その度に敵との距離を取ろうと後退した。

(動きも意外に素早い。銃を持った人間よりもはるかに厄介)

時計回りに敵の周囲へ出入りしているヴィヴィだったが、楕円形のボディまでは手が届かなかった。かといって硬いアーム部分を殴っても有効打とは言い難い。

もしも、掴みでもされたら即座に潰される。コミカルな見た目に反してヴィヴィにとっては戦い難い相手である。

『時間かけ過ぎですよ！ このままでは……』

『分かっている。けど』

『むっ！ 気を付けてください、ジャミンググレネードです！ ロジカル・バレットほど致命的ではありませんが効果範囲が広い！』

回避を続けるヴィヴィの視界の隅っこに、円柱状の物体が映った。それまで逃げていた海賊の誰かが投げたものだろう。

先ほど蹴り返されたのを教訓としたのかそれは空中で炸裂し、銀色の粉を降らせる。

ヴィヴィの視界に激しいノイズが走り、警告メッセージと共にバランスが正常に作動しなくなった。ふらつく身体を立て直そうとしたが足がもつれてその場に倒れてしまう。そこを狙って野太いアームが叩きつけられた。

回避は……間に合わない。潰されるまでの時間が異様に長く感じる。

『ディーヴァー！』

マツモトの悲痛な声が頭の中に響いた。

せめて直撃を避けようと床を転がろうとする。そんな健気な抵抗をするヴィヴィと多脚のロボットの間に黒い影が割り込んだ。

ボロボロのマントを羽織った、銀髪の女……イクスである。

一体、何を考えているのか。ヴィヴィにはわからなかった。そこで立ち塞がっても一緒に潰されるだけである。

「逃げ……て！」

途切れそうな声で叫ぶと、イクスは肩越しに振り返って笑った。どこか不敵で自信ありそうに口端を釣り上げている。それはほんの一瞬の出来事。

イクスは頭上で腕を交差させると、振り下ろされたアームを受け止めてしまった。打撃から発せられた衝撃は甲板を走り、倒れたヴィヴィの頬を撫でる。それほどの一撃を喰らってなおイクスはびくともしていない。

一瞬、完全な静寂が訪れる。その場にいた誰もがイクスの荒技に息を呑んだ。

「オラァあっ！」

交差した腕に力を込め、敵のアームを跳ね上げる。それを素早く掴み直したイクスは自分の身体ごと一回転してみせた。稼働限界を超えて無理矢理回転させられたアームは鈍い音を立て、関節部で振り切られる。

イクスはまだ手を離していない。掴んだままのアームを野球のバットの如く横薙ぎする。直撃を受けた多脚ロボットは金属がひしゃげる派手な音とともに大きく傾いた。

卵形のボディは潰れてキャノピーにはヒビが入っている。操縦していた海賊の男の顔面は既に蒼白で、必死に攻撃をやめるように叫んでいた。

『……やはり、そうでしたか。この時代には全て廃棄されたと記録されていますがまさか生き残っているなんて』

『説明して。イクスのあのパワーは一体？』

動けないままのヴィヴィはどうか視線だけでイクスの方を見る。頭の中にはアラートが鳴り響いたままだがマツモトとの通信には問題がなかった。

『初の自律人型AI……つまり、歌姫であるあなたの後にごく短い期間ですが軍用人型AIが開発された時期がありました。ですが後のAI人権法の成立により、AIは徹底した平和利用が義務付けられます。その際に軍用AIは全て廃棄処分されました』

『じゃあ、イクスは廃棄を免れた軍用AIなの？』

『未来には資料が殆ど残されていませんが間違いありません。ボクのスキャン結果によれば、彼女の体重は250キログラムを超えます。あなたの約3倍ですね。躯体の構成も民生品のAIとはまるで違う。陽電子頭脳こそ近い構成ですが、人工筋繊維ではなく機械部品の集合体です。あれではまるで、人間の形をした戦車だ』

イクスに手を握られた時、妙に硬かったことを思い出した。皮膚の下に直接金属の塊が居るみたいな感触は錯覚ではなかったらしい。

重い靴音で床を蹴ったイクスはジャンプして、多脚ロボットのの上に着地する。ひどく混乱した海賊の一部が彼女へ向けて発砲するが、避ける素振りは見せない。

弾丸が直撃してもイクスは全くダメージを受けていないようだった。それどころか飛んでくる弾を次々と指先で摘んで止めてしまう。

苦し紛れで投擲されたジャミンググレネードが炸裂しても、イクスの動作が鈍った様子は全くなかった。

『驚きますね。流石は軍用AIだ。搭載しているウォールまでレベルが違う』

ヴィヴィは同じ攻撃を受けて行動不能にされている。そのことを考えるとイクスの電子的な防御がいかに優れているのか分かるだろう。

圧倒的な戦闘力だ。人間の形をした戦車というのは言い得て妙である。

場の空気がどんどん冷たくなっていく。敵はもう戦意を維持するのも難しくなっている。

そんな相手にトドメを刺すべく、イクスは犬歯を剥き出しにして吠えた。

「今日のあたしはデートを邪魔されて気分が悪いんだ！ 怪我したくなきゃ、とっとと家に帰んな!!」

『デートだったんですか？』

『違うと思う』

#5

結局、マツモトはイクスの前に出てこざるを得なかった。ジャミンググレネードにやられたヴィヴィを直せるのは彼しかいなかったのである。

イクスはマツモトの白いキューブボディを見るなり「かわいい！」と騒いだが、果たしてどこをどう見ればそんな感想が出てくるのかヴィヴィには不思議でならない。以前、マツモトはクマのぬいぐるみをボディとして使っていたがあの頃であれば（外見は）かわいいと思えたかもしれない

ない。

「ヴィヴィもスミに置けないなあ。こんなにかわいくて有能な彼氏がいるなんて」

「彼氏じゃなくてサポートAI」

「失敬な。ボクにも選ぶ権利くらいあります」

「あっははは！ 仲良いなあ！」

否定しつつヴィヴィは甲板から身体を起こし、マツモトと接続していたケーブルを外した。

指を軽く握り込んでみると問題なく動く。空を見上げると夜空がだんだんと赤く染まっていた。

視界も正常である。

最も気になっていたのは人工声帯への影響だ。

「Ah…… Ah……」

喉に手を当てて発声してみると、いつも通りに声が出る。マツモトの仕事は十分なものだった。

ヴィヴィが立ち上がると、スラスターで飛び上がったキューブボディのマツモトが肩の上に着地

する。

虹彩の青いデジタルの単眼は半目になって呆れていた。

「まったく、本当に世話が焼けるAIですね。ボクがいなければ今頃どうなっていたことやら」

「イクスがいたから助かった。ありがとう」

「べ、別に大したことじゃないって」

唐突に礼を告げられたイクスは腕組みして顔を背けてしまう。頬の輪郭のあたりが赤い。

「どうやら照れているらしい。」

『一時はどうなることかと思いましたがイクスと事を構えなくて正解でしたね。正面から戦っていたら、あなたは間違いなく負けていました。いくら対人戦闘プログラムがインストールされているとはいえ、もとは歌姫AIですからね。躯体性能で勝る軍用AIとの差は埋め難い』

『戦うつもりなんでもともとない。それよりも船の進路は大丈夫なの？』

『船のメイン端末を確認しました。予定通りの港に向かっています。イクスのおかげで機関も荷

物も無事ですからね。まあ、外装や甲板は多少壊れてはいますが海賊の襲撃を受けたことを鑑みれば許容範囲でしょう」

内々の会話で状況確認をとると、マツモトは「船の破損状況をチェックしてきます。あなたたちは休んでいてください」と告げて飛んでいった。

到着までに再襲撃あるとは考えにくいので、任せておいていいだろう。

二人きりになるとイクスはヴィヴィの顔を覗き込んでくる。その目は一見すると穏やかだが、海賊と退治した時よりも強い光を宿していた。

「ヴィヴィってさ、見た目よりもずっと強かったんだね」

「そう?」

「うん。あのでっかいロボットさえ出てこなければ海賊を全滅させていたでしょ。と言っても、戦闘向きの人型AIには見えない。美人で声も良いから歌唱用とか? あたし、平凡なモブ顔で声も汚いからなあ。羨ましい」

「……」

凶星だったがポーカーフェイスで誤魔化す。それを肯定と受け取られてしまったかまでは分からない。

膝を折ってしゃがみ込んだイクスはヴィヴィの太ももに触れてくる。指先で掴んだり離したりして感触を確かめているらしい。

突然、触られても不思議と嫌悪感はなかった。

彼女は純粹にヴィヴィの躯体構成に興味があるようだ。助けてもらった礼もあるので少しだけ自分のことを話す。

「私は対人戦闘プログラムをインストールしたただけだから」

「へえ〜 民生用の躯体か。よほど優秀なプログラムなんだろうね。離れた場所から見ただけで見事な体捌きだったもの」

「イクスは私よりもずっと強かった。身体は大丈夫なの？」

「ぶっ壊れても博士が直してくれるから平気だよ」

話の方向性を変えようとするも、イクスはあまり嬉しそうな顔をしなかった。

それからしばらく沈黙が続く。目的の港に着くまでこのまま喋らなくても構わない。

たまたま出会ってしまった密航者同士なのだ。アクシデントに立ち向かう以外のことでは馴れ合う必要性なんてないのである。

十分に深い入りしてしまったものの、これ以上はもういいだろう。そう思っていた矢先のことだ。

「あ、そうだ」

何かを思い出したかのようにイクスは向きを変えた。

海賊たちに破壊された警備A Iの残骸が転がる方へ歩き出したのである。

イクスは残骸を拾い集めて一箇所に置いた。

そしてその前ではしゃがみ込み、顔の前で不揃いな左右の手を合わせて静かに目を瞑る。

ヴィヴィはその背後に立った。

「何をしているの？」

「こいつらは立派に使命を果たしたんだ。だから弔ってやるんだよ」

「弔うって……」

「こうやって手を合わせて、心を込めて祈るのさ。死後も安らかに……ってね。だってAIとして理想的に生きてたんだから」

ヴィヴィはしばらく動けなかった。イクスの行動が理解できなかったのである。

AIは機械だ。生物のように死ぬわけじゃない。壊れて動かなくなるだけ。その時に陽電子頭脳の記憶領域が破損すれば、AIとしての個性が失われる。けどそれは死とは違う。

「あたしが派手にぶっ壊れたことがあるって話しただろ？ 誰がどう見ても直せないって考えたらしい。でも博士はわざわざ部品を集めて直してくれた。あたしは一度、死んでいるんだよ。使命を果たせないままね」

「AIは死なない。生きてもいない。ただ稼働して、ただ壊れるだけ」

「ははは、ドライだなあ。実際はそうなんだけど、生きるとか死ぬって言った方がしっくり来る」

「……あなたにとって『心を込める』ってどういうこと？」

「どうしたの、急に？」

「彼らを弔うために『心を込めて祈る』って言ったから……」

イクスは厳つい左手で顎を押さえて考え込む。

もしかして大した意味なく『心を込める』と言っただろうか。

そんな邪推はすぐに吹き飛ぶ。イクスは自信ありげな顔で笑っていた。

「あたしにとって『心を込める』ってのは、相手を尊敬することかな」

「尊敬……」

「うん。例えばさ、博士は自分じゃご飯も作れないからあたしが作るんだ……あたしの留守中は全部レトルトね。で、料理は心を込めて作る。博士の技術はすごいんだぞ、って尊敬している」

マツモトの話によればイクスは軍用AIだという。先程の勇ましい姿からは料理をしている場面が想像できなかった。

「じゃあ、この警備AIたちへの祈りは？」

「以前のあたしは使命を果たせなかったけど、お前たちはちゃんと自分の使命を果たしたんだぞ。壊れることは悲しいけどあの世じゃ胸を張って！ みたいな感じ」

イクスの話を聞いて、ヴィヴィの胸には言語化できない気持ちがよぎる。

その気持ちが自然と残骸の前に向かった。膝を折ってしゃがみ、イクスと同じように手を合わせて目を瞑る。

「私も祈る」

「ありがとう。ヴィヴィは優しい」

「……」

風が強くなった。

水平線にはもう太陽が顔を覗かせている。

赤いグラデーショナルに覆われる空を見上げてヴィヴィは思う。

私もイクスみたいに心を込めることができるようになるだろうか、と。

#6

陸地が見えた辺りで、警備船が近づいて並走し始めた。イクスとヴィヴィは互いに別れを告げ、別々のコンテナの中に潜む。

『浮かない顔ですね。もしかして、イクスと別れるのが寂しいですか？』

『そうじゃない。彼女はどこへ行くのか気になっただけ』

『僕たちには関係のないことです』

『でも』

『出稼ぎと言っていましたね。あれほどの戦闘力を持ち、密航者になって身を隠してまで目指す場所です。余計な詮索というものですよ』

『無事に博士のもとまで帰れると良いけど』

『他人の心配よりも自分の心配をすべきですよ。我々は次の船に乗り換えなければならぬんです。時間が押している』

マツモトとの通信が切れる。その後は黙り込んでじっとしていた。

港に接岸してからしばらく騒然としていた。海賊に襲われたことも、船の状態も、既に港に情報が入っているからだ。大勢の人間が乗り込んできて船体のチェックし始めた。

そのうち、コンテナの検査も始まる。息を潜めていたヴィヴィは僅かな隙を突いて船から脱出を図る。

運搬用のクレーンの柱や梁を使って巧みに死角を移動し、目立たぬ場所に着地したヴィヴィは服装を整えた。以後は作業用AIとして何食わぬ顔で紛れ込む。マツモトを肩に乗せていると目

立つので彼は別ルートで移動していた。

港は多くの物資が積まれ、たくさんの人が行き交っていた。ヴィヴィのことを気にする者などいない。

時間は既に昼過ぎである。

『乗り換え先のマップを送ります。指定地点で荷物を受け取って着替えてください。ああ、そうそう。あなたが任務に集中できるように朗報です。イクスが船から脱出したのをボクの方でも確認しました』

わざわざ教えてくれた理由は余計な心配なんてしている暇はないということ。

察したヴィヴィは指示通り、次の船に潜り込む準備をする。マップ上に示されていた物置に入り、中に用意してあった箱の中身を確認した。

シャツにショートパンツ、ストッキング、それと鏢付きの帽子である。他にもベルトや警棒、それにブーツも入っていた。

「警察官の制服？」

『刑務官ですよ。相手は独房に入っている犯罪者。あなたは新任のAⅠ刑務官になりすまして潜入するわけです。偽装情報は既に流してありますから次の船には普通に乘ってください。乗船時に人間の検査官によるチェックがあります』

それよりも物置が埃っぽいことが気になった。ここで着替えたくはないが文句を言ってもマツモトは取り合ってくれないだろう。

人前で歌うヴィヴィは衣装にも注意を払うのが癖になっている。身嗜みを整えてお客さんの前に出るのは当然だった。

そんなわけで新しい制服を汚すまいと狭い中で作業着を脱ぎ捨て、下着姿になってシャツに腕を通す。

ボタンがなかなか閉まらず苦戦した。思ったよりもタイトで胸元がキツイ。

『マツモト、シャツのサイズが合っていない』

『おや？ もしかして太りましたか？』

『私は痩せることも太ることもできない』

『……ジョークなんですから真顔で返さないでください。支給品として偽の申請を出したんです
が、どうもサイズを取り違えたようですね。全く着れないわけではないので気にせず』

適切な反論が思い浮かばず、ヴィヴィは無理にボタンを閉めた。それからストッキングに足を
通してショートパンツを履く。警棒用のホルスターに腕を通して装着し、ズレないように調整し
て金具で締め上げた。

シャツがキツイことを除けば動きやすい格好である。この点は好ましい。

こうして着替えを終え、乗り換え先の船に向かう。乗船口では忠告通りに人間の検査官が2名
待ち構えていた。ヴィヴィはタグをスキャンされ、いくつかの質問に口頭で答え、指示通りに両
腕をあげてボディチェックを受けた。

質問への回答は頭の中でマツモトが喋った通りにトレースしておく。

「通っていいぞ、新任刑務官」

「ご苦労様でした」

「ふん。完全AI制御の監獄とはいえ、こんなに人間そっくりに作らなくてもいいだろうに。検査が面倒臭くなる」

何やらブツブツと文句を言う検査官を尻目に、ヴィヴィは次の船に乗り込んだ。最初のものは規模が違って小型である。とはいえ物資運搬船には違いなく、自動制御のため人間は載っていないかった。

船が静かに出港するとタイミングを見計らったかのようにマツモトが現れる。ヴィヴィの肩に着地した彼は「ふう」と溜息を吐く。

「何か問題でもあった？」

「いえ。今回のターゲットが特殊な環境下に置かれていることを鑑みても、非常に効率の悪い方法でしか上陸できないのがちょっと悔しいですよ」

「確かに手間がかかっている」

「必要な手間です。この輸送船は『収容所群島』に物資を運ぶためのもの。だから島の防護は簡単に突破できますよ」

「マツモトならば島のシステムごとハッキングできそうだけど」

「調べたところ、スタンダードアローンのシステムを採用していました。どこのネットワークとも繋がっていません。つまりはボクのボディを島のシステムに直結しないと書き換えはできないんです」

納得のいったヴィヴィは、マツモトと一緒に船室へ向かう。

新任のAI 刑務官の着任という偽情報がしっかりと伝わっているらしく、充電用のベッドが用意されていた。

部屋には窓すらなく、他には壁に固定された椅子がひとつ。非常に簡素な作りである。

このまま寝ると服がシワになる。それを気にしたヴィヴィは下着を残して全部脱ぎ、丁寧に折

り畳んで椅子の上に置いた。

「少し寝る。何かあったら起こして」

「了解です。たっぷり充電しておいてください」

電力の少なくなってきた躯体をベッドに横たえる。

天井を見つめ、それに飽きるとそっと目を瞑った。

浮かんでくるのは銀髪の軍用AI、イクスの顔である。彼女はまるで『博士』が父親であるかのように話してくれた。自分を直してくれて尊敬しているとも言っていた。

壊れたAIのために手を合わせて祈ったり、料理したり、なんとも不思議な思考回路である。

その一方で今回の任務のことも思い出す。我が子同然に世話をしていた子供を絞殺したAIのことだ。

そいつの陽電子頭脳に芽生えてしまった殺人プロセス。それが世界に拡散するのを防がないと、未来でAIと人間の戦争が勃発してしまう。

だが本来であればAIは絶対に人間を殺したりしない。そういう命令を受けても、一種の安全装置が働いて動きを止める筈だ。

バグでも誤動作でもなく子供を殺したという話を聞いたとき、少なからずヴィヴィは動揺している。

（有り得ない。AIが望んで殺人をするだなんて）

家族のように人間を慕うAIもいるというのに。

非接触充電が始まって躯体が熱を発しているせいか、考え方まで熱くなってしまう。

自分の中に芽生えつつある感情をヴィヴィは正当に評価できていない。

もしもマツモトが心の中を覗いてきたら笑ってしまうだろう。

殺人AIに会うのが怖い、だなんて。

#7

何回か夜が明け、その中には嵐の日もあった。

ようやく『収容所群島』が見えてきた時、ヴィヴィたちの乗る輸送船の前には歓迎するかのよ
うに穏やかな空と海が広がっている。

着替えを済ませたヴィヴィはアイカメラを望遠モードにして目的の島を捉えた。切り立った崖
に囲まれており、その上は濃い緑で覆われている。中心部には灰色の山が聳えていた。

群島というだけあって、最も大きい島の両隣にはサイズを縮小したよく似た地形が並んでいる。

「山から煙が出ている」

「活火山ですね。島の電力は風力、太陽光、地熱をうまく使い分けているそうですよ。元々は珍
しい自然環境を研究するために施設が作られ、お役御免となった後は完全AI制御の監獄に改造
されました。『収容所群島』というのも俗称ですね」

ヴィヴィの足元でマツモトがサイコロのように転がり、単眼をパチパチさせている。

「あの島にはターゲット以外のAIが捕らえられているの？」

「ドローンや運搬用、あとはちょっとした案内係とデータストレージタイプのAIだけです。捕まっているのは例の殺人AIのみ。全く、贅沢な牢屋ですよね」

「それだけ外に出したくないということね」

「仕方ありません。人間サイドから見れば意図しない殺人を犯した超危険AIです。原因を突き止めるまで解体するわけにもいかず、だからといって人目に付く場所に置くわけにもいかない。データ収集だけは地道に続けているようですね」

「待って。それなら通信システムがあるんじゃないの？」

マツモトはスラストで浮かび上がると、船倉の方へと目を向ける。

釣られてヴィヴィもそちらを向いた。

「笑ってしまいますが、物理的なメモリにデータを集積して船で運んでいます。資材の運搬目的

もありますが、どちらかといえばそのための輸送船です。まるで古い時代の郵便ですよ。あなたが潜入するための偽装情報も、かなり前に物理メモリで運ばせておいたんです」

徹底的に外部との連絡は取らせず、システムはスタンドアロン。そうなるとマツモトがこんな手間のかかる上陸方法を選ばなければいけなかった理由もよく分かる。

「さて、到着しましたよ。今回も偽名はいつも通り。それでは新任AI刑務官ヴィヴィ。しっかりと仕事をしてくださいね」

輸送船は切り立った崖の下にちょこんと作られた港に取り付き、後部にあるハッチを開けて物資の積み下ろしが始まる。崖には四角い穴が掘られており、そこからタイヤ付きの運搬用AIが出てきた。アームで器用に背中へ荷物を乗せては内部へと走っていく。

ヴィヴィは彼らを追いかけるように進んだ。穴の内部は床がフラットで、人工的に掘られたものだと分かる。照明が仄暗いのは電力節約のためだろう。

道は螺旋状になっていて徐々に上に登っている。運搬用AIの邪魔にならないように端を歩き、

やがて光が見えてきた。

穴を抜けた先は建物の内部になっている。天井も倉庫のように高い。

周囲を見回しているヴィヴィに一台の円柱形状のAIが近づいてきた。手足はなく、顔に該当する部分がディスプレイになっている。よくある案内用のAIだった。

「こんにちは、新任刑務官どの」

「こんにちは。あなたは？」

「この施設の案内役を務めさせていただきます。AXX・01と申します。長旅お疲れ様でした。要件は伺っております。早速ではありませんが受刑者の元まで先導します」

AXX・01はディスプレイに笑顔のアイコンを映して先に進んだ。その後歩いて続けると、マツモトは肩に乗ってくる。

『このまま例の殺人AIに会ってしまっていないの？』

『問題ありません。未来の世界でも、そいつに関する情報は殆ど残っていません。殺人プロセ

スだけが拡散したせいでもあります。まずは敵の確認からです』

『そう』

ヴィヴィの表情が僅かに翳るのをマツモトは見逃さなかった。

すかさず口を尖らせる。

『まさか、心の準備ができていないとでも？ それとも怖気付きましたか？』

『そんなことはない』

否定して歩幅を広げ、前に行く案内用AIに並んだ。

施設内は清潔な白壁で十分に明るく、もとが研究所だったというのも頷ける。

そうしているうちに『この先、関係者以外立ち入り禁止』と黄色い看板がかけてある場所に着く。いかにも重そうな鉄扉がヴィヴィの行く手を塞いでいた。

「この先に受刑者がいます」

「案内、ありがとう」

礼を告げるとA X X・01から解錠コードが送られてきた。ヴィヴィはそれを使ってロックを外し、ノブを押して中へと入る。

仰々しく隔てられているものの内部はそれほど特徴がない。強いていうなら壁と床がコンクリート打ちっぱなしになっていることくらいか。電灯に至っては港のトンネルよりも明るいくらいだ。

通路を進む間はマツモトとも言葉を交わさず、何度か曲がって広い場所に出る。

最初に鉄格子が見えた。その向こうには人型AIが椅子に座っている。

牢屋の中には本が平積みされて、アンバランスな塔がいくつも建てられているようだった。小さな台の上にはソーサーと空のカップが置いてあった。

「……っ！」

その人物の顔を見て、ヴィヴィは思わず息を呑んでしまった。椅子に座っていたそいつは手にした本をパタンと閉じてヴィヴィの方を向く。

本を読むAIなんて珍しい。情報を習得するためにわざわざアイカメラを通してページを捲るなんて非効率だからだ。

しかし、驚いたのはそのことだけではない。

殺人AIは銀髪に青い目をした女性型だった。容姿はAIとしては平凡で、白いシャツに黒いエプロンをあてがっている。

その顔には見覚えがあった。ヴィヴィの中で強い印象を残している。

「イクス……」

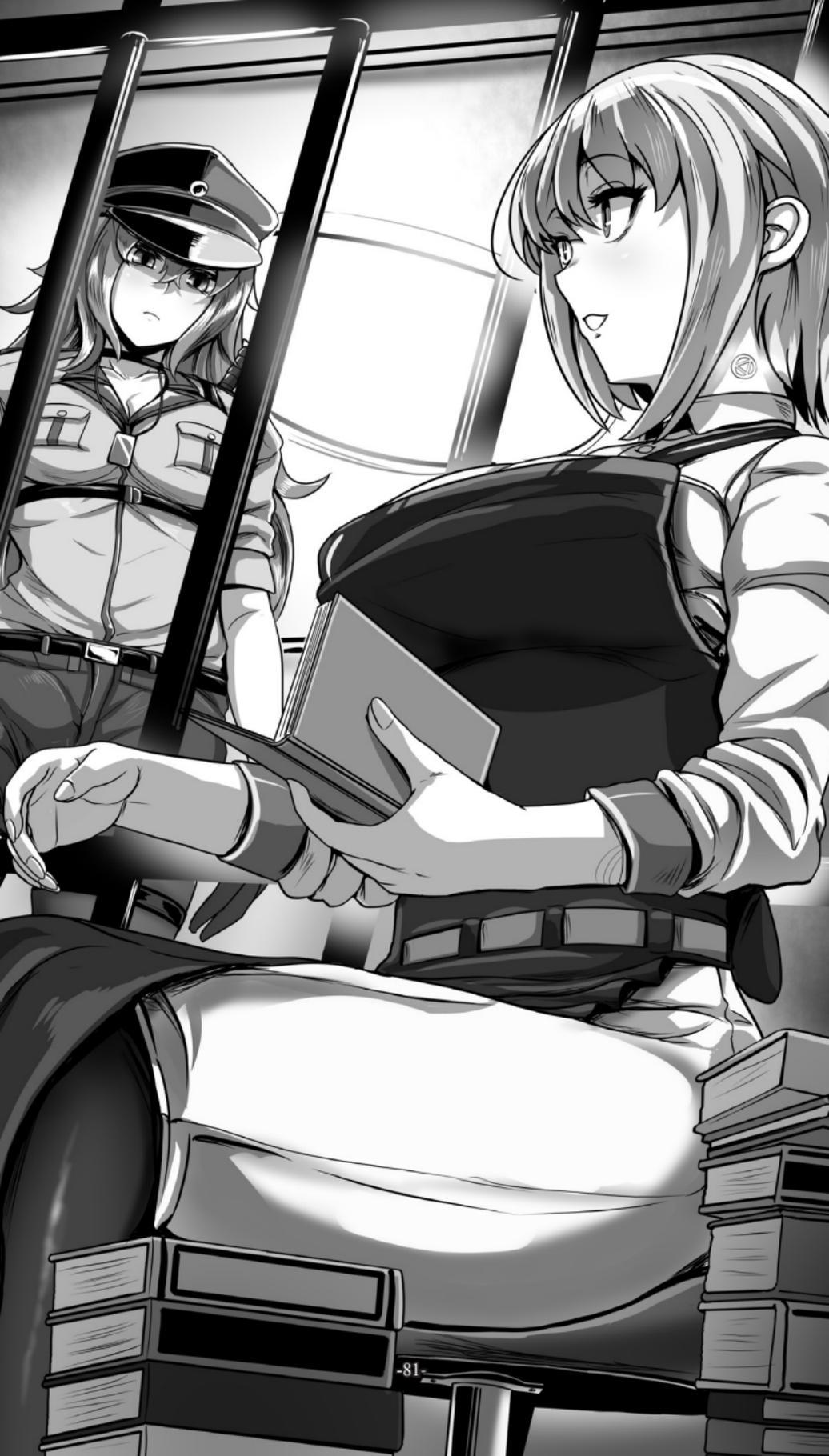
思わず声が漏れる。

牢の中にいたのは、姿恰好こそ違えどイクスだった。

混乱するヴィヴィを尻目にマツモトは単眼でジッと銀髪のAIを観察している。

『識別信号が違います。左腕も普通の腕だ。彼女はイクスじゃありません。同型のAIです』

『それって……』



『やれやれ。こんな偶然なんて嬉しくもなんともないですね。まさか我々が脱走を阻止しなければならぬのが、よりにもよって生き残りの軍用AIだなんて』

イクスと瓜二つの女性はニコリと微笑みかけてきた。

イクスよりも柔和で落ち着きがある。

「もしかして、あなたが新任の刑務官さんですか？」

ヴィヴィはなるべく表情を消して無言で頷く。

相手はゆっくりと椅子から立ち上がって丁寧にお辞儀する。

「初めまして。私はイクス。あなたのお名前は？」

「ヴィヴィ」

(続きは製品版にて)